

種乞い狐の
お宿
な
下へ
ようこそ!

挿絵 みあ

犬吠ろめみ

試し読み版

第一章 種乞い狐の伝説

第二章 幻燈亭へようこそ！

第三章 女将のスケベなおもてなし

第四章 処女か否か……それが問題だ

第五章 行燈の明かりに照らされながら

第六章 It's 正体 ぐ me！

第七章 人見知り少女とかけて処女ま〇こと解く

第八章 折り重なる祈り

第九章 月下にて、初めての夜

第十章 夢と鈴

第十一章 召しませ姉妹丼

第十二章 嘘と涙

第十三章 指ちゅばは立派な治療行為です!?

第十四章 Answer

第十五章 秋の夕暮れは、甘く切なく

番外編 ほろ酔い三姉妹と、混浴月見酒

登場人物 紹介



くず
菫葉

妖狐三姉妹の長女。
優しく癒し系な性格と抜群のプロポーションの持ち主。
幻燈亭の女将も務める。



りんか
燐火

妖狐三姉妹の次女。
可愛らしい見た目とは裏腹に勝気な性格。
ツンデレな体質が周りを困らせることも。



つくよ
月夜

妖狐三姉妹の三女。
人見知りでオドオドしているが実は甘えたがり。
子供っぽさが残る容姿ながらもエッチには興味津々。



くりもとしろう
栗本史郎

医療機器の営業マン。
真面目な好青年だが、たまに自由奔放な一面を覗かせることも。

第一章 種乞い狐の伝説

「種乞い狐の伝説、ですか……」

CT機器の納品を終え、院長室にてジャスミンティーをおいしくいただいた俺は、恒例となった戸沢先生の小話に、とりあえず相槌を打った。

「うん。この狐ヶ崎きつねがさきには、若い男をかどわかす悪い狐がいてね——」



むかしむかしこの狐ヶ崎たてがしに忠七ちゅうしちという目鼻立ちのよい男がいた。肝煎きまひの息子ということもあって働きもせず遊び回り、ほうぼうに女を作っては子を生じた。

あるとき、忠七が行方不明になった。すぐに村のうわさになったが、どうせ土地の女に飽きて吉原よしわらにでも行ったのだろうというのが衆目の一致するところだった。

しかし、1カ月経つても、2カ月経つても帰つてこない。肝煎きまひも、放蕩息子ほうとうしことはいえ心配になり、江戸へ使いをやったが、そもそも来た痕跡がないという。すわ神隠しか、と村内は騒然となり、村人ひとりひとりに聞き取りを行つてみると、2カ月ほど前に、小萩山こはぎのやまへ向かう姿を見た、という者が現れた。

その情報を頼りに山内を搜索してみたところ、山頂ちかくの沢にて忠七の死体が見つか

った。死体は10〜20歳ほど老けていたうえにミイラのごとく干上がっており、さらには狐と思われる真新しい獣毛にまみれていた。

小萩山には、化け狐が棲^すんでいるという言い伝えがあり、忠七は狐に騙されて精という精を吸い尽くされたのだ、という話になった。

村人は狐の祟^たりを恐れ、山頂に稲荷^{いなりぼこ}祠を建てることによってそれを鎮めようとした――



「いやあ、なかなかすごい話だよねえ」

熱っぽく語り終えた先生は、ジャスマンティーで舌を癒やしつつ、俺にチラチラと視線を送ってきた。なにか感想を言え、ということだろう。

「……これって、要はやりまくって枯れたってことですよね？」

「まあ、そうなるねえ。同じ男としてはうらやましいような、うらやましくないような……」

「死んだら元も子もないですよ。しかしいまなら祟りに見せかけた偽装殺人が疑われる話です。周到に狐の毛まで用意して」

「この伝承の恐ろしいところはね、栗本^{くりもと}くん一面^{おもて}を伏した先生は、眼鏡のブリッジを中指でクイツと押し上げた。「現代でも似た事件が起きた、ということなんだ」

まさか……。

「……ほんとですか？」

「うん。つい最近——といってももう10年ほど前の話だけど、種乞い狐にかどわかされたってひとがいるんだ。新聞で見なかったかい？」

「覚えてないですね。10年前っていうとまだ高校生くらいだったんで」

「30代の男のひとが1年ほどいなくなつてね。戻つたときには痩せ細つていたうえに、40〜50歳ぐらいの外見になつていた」

「消えてたのは1年だけなのに、10歳以上老けてたつてことですか」

「そのとおり」

「でも、それだけじゃ、種乞い狐でしたっけ、その仕業だとは言えないんじゃない？」

「……じつはそのひと、忠七さんと違つて生きて帰つてきたんだ。どこに行つていたのかは黙して語らずすぐに亡くなつたんだけど、最期の言葉が『翠、すまない』^{スイ}だったそうなんだよ」

「？ なんの関係が？」

「^{くだ}件の種乞い狐はね——翠、つて名前なんだよ。男のひとは、たまたま旅行で来ていただけだから、知つていたとは思えない」

「……………」

先生は、俺の反応に満足したのか、子どもっぽい笑顔を浮かべて言った。

「栗本くん若いしき、狐には氣をつけたほうがいいんじゃない？」

「種乞い狐、ねえ……」

俺の名前は栗本史郎。中堅の医療機器商社の営業マンをしている。現在4年目の26歳。去年まで東京本社勤務だったが今年の4月に東北支社へ異動になった。

戸沢先生の病院は、俺がこっちに來て初めて開拓した営業先で、先方もよくしてくれる、いわゆるお得意様だ。

「営業先を紹介してくれるのはありがたいんだけど……」

生まれも育ちも東北、という生い立ちがそうさせるのか、先生は土地の民話について調べるのを趣味にしている。その成果を前は奥さんに語っていたそうなんだが、こここのころ相手にしてくれないとかで、俺にお鉢が回ってくる。

「さすがに実話とは思えないよなあ……」

会社へ営業車を走らせながら、窓の外に広がる田園風景へと目を向ける。頭を垂れた稲穂の向こう、秋の気配に色づき始めた山々が見えた。雲をまとったそれは、1000年も2000年も前からそこにあつて、いままなお揺るぎない。

「ああいうのを見ると、なんか棲んでてもへんじゃないとは思うけどね……」

そんなことを考えつつ、先生の病院から南に20キロほど下ったときのこと——
山裾の道を走っていると、色づいた紅葉のように真っ赤な丹塗の鳥居が目に入った。

「あんなのあつたっけ……?」



ここ数カ月、週に一度のペースでこの道を走ってるけど、見た覚えがない。なんとなく気になった俺は、路肩ろかたに車を停め、鳥居を眺めてみた。

「うーん……」

ほかに車が来ないことを確認し、道路を渡って鳥居の近くに寄ってみる。

「やっぱり初めて見るな」

辺りを見回し、ここを通ったときのことを思い出してみるが、記憶になかった。

「だいたい、これだけ鮮やかな赤なら見落とすはずがないんだよな」

鳥居は塗りたてのように真新しい。通りすがるだけで記憶に刻み込まれそうだ。

くぐって小山を見上げてみると、石段が上のほうまで続いている。

「なにを祀まつってるんだろう……。種まね乞い狐？ まさかな」

ふと先生の話が思い出されたが、さすがに結びつけて考えすぎだろう。プライミング効果っていうんだっけ、こういうの。

「……………」

時計を見ると3時過ぎ。会社に戻っても今日は営業日報を書いて終わりだし、今Qクエの数カ字も先生のおかげで早くも達成と、わりかしヒマしてる状況だ。上になにかあるのか、確かめてみるのも悪くない。

「先生への土産話みやげになるかもしれないしな」

そう言い訳しつつ――

俺はどこからともなく現れたその鳥居をくぐってみることにした。

「はひっ……、はっ……、ひっ……、ちよ、これ……、しん、どい……」

20分ほど登り続けた結果、完全に息が上がってしまった。

高校までサッカーをしてたから体力あるほうだと思ってたけど、就職してからは草サッカーすらやってなかったからなあ……。

そこまで興味があるわけでもないし、諦めようかな……。

「ち、く、しよう……」

生来せいらいの負けず嫌いが、それを邪魔する。

まあ、あとちよつとかもしれないし、粘るか……。



「はひっ、はひっ、はひっ、はっ……」

結局それからさらに20分ほど石段を登って、ようやく開けた場所に出た。

「ちよ、休憩……」

鳥居にもたれながら、あたりを眺める。石段はそのまま石畳へと替わり、進んだ先には百葉箱ひやくようばこを赤くしたような物体が鎮座していた。



「これ、狐か……？」

歩き寄ってみると、百葉箱の左右にそれを守るような格好で2体の石像が置かれていた。シュツとしたフォルムに、コーンとした面構え。稲荷神社なんかにいるこまね狐だ。

「てことはこれ、稲荷祠なのか」

町歩きをしているとたまーに出くわす、どうぞじん道祖神を祀る小さな祠。

だいぶ年季が入っているのか、ところどころ変色しており、くくられたしめ縄もなか半ば朽ち果てているが、それとわかる程度には原形をとどめている。

「先生の言っていた稲荷祠……ってことはないよな」

まさか、と思いつつどうしても結びつけてしまう……。

「とりあえず撮っとくか」

スマホでパシャリ。

次回訪問時に見てもらおう。あれだけ熱心ならここにも来てるだろうけど、話のネタにはなるぞ。

「ほかに変わったところはなさそうだし、帰るか」

そう思って、石段まで引き返したときだった。

「え……？」

たぶん俺の顔からは、サツと血の気が引いたことだろう。

これがドッキリなら最高のカモといえるほどの驚きっぷりだったとも思う。

石段がなくなっていた。

「嘘だろ」

ホワイ？ なぜない？ 直前まであった……というか、それを登ってきたんだぞ？ 民話の世界じゃあるまいし、いきなりなくなるとかおかしいにもほどがある。

石段があつた斜面を覗き込んでみるが、木と草と土だらけでその痕跡すら見つからない。「どうしよう……。ちよつと下りられそうにないぞ、これ……」

斜面はかなりの急勾配で、知識も道具もない素人が下りられる雰囲気ではなかった。

「ほかに道は……」

あたりを一周し、石段あるいは地ならしされた道がないか探す。

「うーん……」

見落としがないように注意深く見てみたが、下りられそうなところはなかった。ただ一点――

「これって獣道だよなあ……」

稲荷祠の裏から、通れなくもなさそうな道が、山の奥に向かって伸びていた。

「行つてみるか……」

ほかに進めそうな道もないし、ちよつと様子を見てくるくらいしてもいいだろう。進んでも下り道にならないのなら戻ってくればいいわけだし。

そう腹をくくり、獣道へと足を踏み入れる。

地面はそれなりに踏み固められていたが、スーツに革靴だとさすがに歩きづらい。足を滑らせないよう気をつけながら獣道を進む。

帰ったら靴磨かないとなー。

そんなことを考えつつ10分ほど歩いてみたが、道は多少の上り下りを繰り返しながらも
水平――

「この道はハズレだな……。戻るか……」

そのときだった。

遠目に、桃色がかった金髪が見えた。

少女だ。

「あー、すみませんー！ ちょっと道に迷ってしまっつてー！」

しかし聞こえなかったのか、少女は木の隙間をスルスル進みながら林の奥に行っつてしま
う。

「えー……。あー！ すみませんつてばー！」

声を張り上げながら追いかけてみるが、気づく様子はない。

なんだよもう。聞こえてくるのは鳥の声とか虫の音ねくらいでシンとしてるだろ。なんで
聞こえないんだ。

「おーいつてばー！ 反応してくれー！」

駆け足からいつしか全力走になつていたが、それでも追いつけない。女の子はそんな急
いでるふうにも見えないのに歩き慣れているのか獣道をトントン進んでいく。

「あっ！」

舗装されてない道を革靴で全力疾走なんてするもんじゃない。気づいたときにはすつて

んころりん、俺は木の根かなにかに足を取られて転んでしまっていた。

「いつつ。……っていいないし」

痛みをこらえ体を起こしたときにはもう、少女の姿はなくなっていた。

「あーあ……。唯一の希望が……」

というか。

どこだここ。

夢中で進んできたせいか、ふと我に返ると、自分がいまどこにいるのかサッパリわからなくなっていた。周囲を見回しても、どういった経路をたどってやってきたのか思い出せない。

「マズい……。これ、本格的に遭難してないか……？」

そうだ、スマホ。

危機的状况に陥^{おち}ったせいで脳が活性化されたのか、俺は、胸ポケに忍ばせてあったスマートフォン^{スマートフォン}の存在を思い出した。急いで取り出し、現在位置を確認する。

「俺もバカだな。なんで最初にそうしなかったんだ」

最近のマップアプリはやたら性能がいい。近くに林道があればそれを表示してくれるかもしれない。仮にそれがなかったとしても、もといた県道との位置関係くらいはわかるだろう。闇雲に進むよりよっぽどマシだ――

「うあっ……」

と思ったら、まさかの圏外……。本当にどうしよう、これ……。

リン――

そこに響き渡った、澄んだ鈴の音。

顔を上げると、ずっと先に、ふた房の桃色がかつた金髪――

「待って！ 頼む！」

見失ったはずの少女――と思ったときには金髪が翻ひるがえっていた。逃してなるものかと、俺も駆け出す。

地獄に仏！ 大海の浮木うきぎ！ 干天かんてんの慈雨じう！

ここで捕まえられなかったら、俺はこの山で朽ち果てる――とまではさすがに思わないけど、それでもいま道が聞けて、すんなり出られるほうがいいに決まってる。

て――

誰もいない山の中で男に追いかけられたら普通の女の子は逃げるんじゃないかな？ と急によぎる。

あー。

あの子が逃げるのってそういうことー？ それは納得だわー。

「あの一！ 違いますよー！ 俺が追いかけてるのは単に道が聞きたいだけでー！ 迷子なんですー！ 止まってー！ 襲襲ったり絶対しないからー！ 神に誓って襲襲わないからー！」

逆に怪しさが倍増したのか、女の子との距離が開く。

でも言葉を選んではる場合じゃないんだよー。わかってくれよー。

そうこうしてらうちに、女の子が光の中へと消える。

「へ!? 光!」

と思つたが、アレは違う。あそこで林が途切れてるんだ。木がその向こうにないから、日光が直接射し込み、光が溢れているように見えただ。てことは……。

「あの向こうつて、広場?」

力を振り絞つて駆け出す。そして光の中へ――

「え? なんだこれ……」

飛び込んだ俺を待つていたのは、予想どおり広場――というかかなり開けた場所だった。そう、そこまではないんだが……。

まったくの想定外。

夕日を浴びて朱に染まる威容――

そこにあつたのは、古めかしい3階建ての建物だった。

入り口に、『げんとうてい幻燈亭』という看板が掲げられている。

「宿……? こんなところに……?」

どこをどう進んできたかもわからない山奥に、思わず仰ぎ見てしまうような巨楼。
パツと見は瓦葺きの数寄屋造りにも思えるが、専門家じゃないから詳しいことはわからない。ただその広壮としたたずまいは、歴史と同時に建物の風格を感じさせた。

「明かり……。ちゃんと人がいるのか……」

場所が場所だけにひよつとして無人？　と思つたが、そんなことはなかった。

夕日を背にしてもハッキリとわかる橙色だいだいの煌めききらが、まるで俺を誘うように宿の中から漏れていた。

「どうする？　とりあえず道を聞くか？」

どうするもこうするも聞かなきゃ下りられないというのは頭じゃわかつてるんだが……。

なんだか近づいてはいけないような……。

たぶん立派すぎる外観が、俺を気き後おれくさせてるんだらう……。

などと思いを巡らせながら立ちつくしていると――

「あら」

宿の中から和服の女性が現れた。

さっきの少女かと思つたが、桃色ブロンドでも、ツインテールでもなかった。

というか――

超がつくほどの美女。

それが、男を蕩どろかすような微笑を浮かべた。

「お客様なんて何年ぶりかしら。ようこそ、幻燈亭へ」

「まあ、お怪我はありませんか……?」

「だ、大丈夫です、大丈夫」

股間を手ぬぐいで隠し、急いで立ち上がって無事をアピールする。

「あの、驚かせてしまったみたいで申し訳ありません……」

「あ、いえいえ。……あの、女将さんもお風呂ですか?」

男ひとりの湯にわざわざ女将がやってくる、というシチュエーションにちよつとした期待を抱いてしまいがそれを直接口にするのは憚られた。わからないフリをして、意図を訊ねる。

「お背中を、流しに参りました」

「おおおお……! やはりそうなのか……!」

「女将さん自ら、ですか。サービスいいんですね」

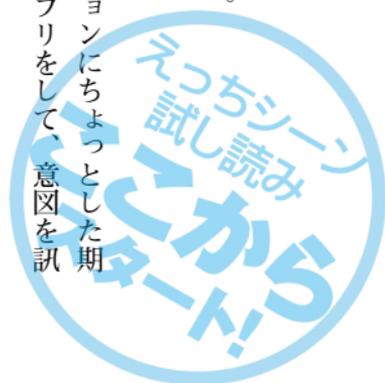
「さーびす、ですか?」

「ありや、違いましたか」

棒読みチックなリアクションについて聞き返すと、葛葉さんはあわてたように「あの、いえ。さーびすです」と言った。

「久しぶりのお客様ですから、満足いただけよう精一杯おもてなししようかと……」

なるほど。宿も湯も景色もいけどこの立地だからなあ。なかなか客が来ないんだらう。俺はいいタイミングで泊まったのかもしれない。こんな美女に背中を流してもらおう機会なんて一生に一度あるかないかだからな。



「じゃあお願いしてもいいですか？」

そんなことを考えつつ風呂イスに座り直すと、背後に葛葉さんがひざまず跪く気配を感じた。

「はい。では——」

それにしても——

肌襦袢よかったなあ……。

あの薄布の向こうに葛葉さんの裸があるかと思うとすぐ興奮する。それに肌こそ見えなかったが、肉づきの豊かさはハッキリとわかった。とくに胸。ユサツとしたふくらみが、布地を押し広げるあのシルエツト……たまらん！

「失礼、いたします」

うしろで石鹸せっけんを泡立てる音が聞こえたあと、にゆるるとしたぬめりが背中を襲った。これは——手の感触……？

「あの……、ひよっとして直接手で洗ってるんですか……？」

「はい。手ぬぐいの方がよろしいですか？」

「あ、いえ……。く……。つ、このままで、大丈夫です……。つ」

背中を走る、痺れのような甘い感触。細くて長い指がぬめりを伴って背中をは這い回るのは、想像以上に心地よかった。いきなりこんなことをされるとは思ってたせいかもあって、興奮してしまふ。

にゆる、にゆるるつ、ぬちゅ、にゆるう……。つ。

肩から肩甲骨けんこうこつ、肩甲骨から背中の中の真ん中を通って腰へと手が下りていく。その手つきは、

玉を磨くように丁寧で、女将さんの仕事熱心さが伝わってきた。

「それにしても、ものすごくサーブスいいんですね……。こんなことしてもらえるなら今度はちゃんとした客として来たくなっちゃいますよ……」

そう誉め称えると、葛葉さんは思いのほか感情を露わにした。

「本当ですか？　そう言っていただけるととても嬉しいです……」

追加サーブスなのか、腰から腹へと手が伸びてくる。

「あ……っ、く……っ、前も、洗ってくれるんですか……？」

「お嫌でなければ……」

「嫌なわけが……。女将さんがしてくれるというならぜひぜひお願いしたいです……っ」

「くす……。わかりました。では……」

ぬちゅっ、ぬちゅっ、にゆるう……っ。

俺の気分を盛り上げるように、腹そして胸へと伸びるたおな手。とくに胸は男にとっても性感帯のため、ねっとりとした手つきで撫でられるたび、いやらしい気持ちになっってしまう。

（なんかもう背中を流すサーブスというよりソープに来たみたいな感じになってきたな……。このままいけばあの柔やわらかさうなおっぱいで洗ってくれるなんて展開も……）

ナイナイと思いつつそんな妄想を逞たくましくしていると――

シユル、シユル、シユルリ。

背後から衣擦れのような音が聞こえてきた。

こ、これはまさか……。

期待にちんぽをふくらませた瞬間――

むにゅん！

至高の感触が俺の背中を襲った。

「うはっ！」

思いつきりへんな声が出た。それでも葛葉さんは気にせずソレを押しつけてくる。

そう――

蕩けるような柔らかかさとぷるんとした弾力を兼ね備える魅惑の物体――

おっばい。

おっばい！

おっばい！！

しかもサイズがすごい。俺の背中に当たっている乳肉の面積を考えると、巨乳という言葉でも不足。爆乳とか超乳の域だろう。

「いかが、ですか？」

「最高です」

ほかに形容のしようがない。

「くす、ありがとうございます」

ストレートな賛辞が嬉しかったのか、葛葉さんの行為がより大胆になった。俺の体に腕を回し、抱きつくように乳洗いをしながら胸や腹も洗ってくるのだ。



むにゅ、にゆるっ……ぬる、にゆる、むにゅん。

恋人のような密着感の中で形を変え続ける乳房。その柔らかか天国に、俺のちんぽは完全にそそり勃たつた。

あー、ちんぽしごきたい！

でもここで急にそんなことし始めるのはなあ……。葛葉さんいるし無理だよなあ……。

くっそー！ ギッチギチにいきり立っているというのに解放してやれないのがこんなにつらいとは！

そんな俺の昂たかりを見抜いたか——

葛葉さんが耳もとでささやく。

「あの……もしよろしければ、下半身も……いかがでしょうか？」

うわっ、そこまでしてくれるのか！

「ぜひ！」

「ふふ。かしこまりました」

葛葉さんがさらに体を押しつけてくる。首筋に吐息がかかり、葛葉さんの甘い匂いが鼻先に香った。そのせいでさらに滾たぎるちんぽ。

は、早く……！！

早く、下半身ミを洗ってほしい！

しかし、葛葉さんの手つきはあくまで緩やかだ。俺を焦じらすように、ゆっくりゆっくり洗っていく。

太もも、膝、ふくらはぎ、そして——股のあいだ。頑かたなに中心を避けていくスタイル。くー、下半身かみってそういうこと!!

これは逆につらい！ 生殺しじゃないか！

「あ、あの！」

「はい……？」

「あの、ですね……」

い、
い、

言えない！ 言えないぜ、そんなこと！

俺の根性なし！ スバツと言っちゃまえ！ イケるって！ たぶん！ きつと！ おそろ

くは！ と内心葛藤を続けていると——

「もし……要望があたりの際は、遠慮なくお申しつけくださいね……？」

葛葉さんの甘ったるい声が俺の耳みみを打った。

アレだ。

いわゆる『かゆいところありませんか？』ってヤツだったのかもしれない。葛葉さん的にはそんな軽い気持ちだったのかもしれない。

でももう俺はそこに全力で乗っかることしか考えられなかった。

「こ、こども洗ってもらっていいですか!？」

葛葉さんの手首をつかみ、いきり立った剛直を握らせる。

「きゃっ!？」

悲鳴。

さすがにダメか……と思ったが――

葛葉さんは、おずおずと、しかししつかりと俺のちんぽを包み込んでくれた。

「すぐく昂っていらっしやるんですね……」

にゆる……にゆるり……にゆる……にゆるり……。

「大きくて硬くて……とても熱い……」

季節は10月。日が落ちればけっこう寒くなるし、ましてや裸で外にいれば体は冷えてしまふ。しかし俺のペニスには、火がついたようにドンドン熱くなっていた。

にゆる……にゆるるう……ぬちゆ……にゆちゆう……。

「あ……っ、く……っ」

熱くなった肉竿にくさおに這わされる葛葉さんの冷たい指先……。それがめちやくちや気持ちいい……。

「痛くは、ありませんか……?」

竿を下から上へとにゆるりにゆるりとしごきながらもう片方の手を玉袋に伸ばしてくる葛葉さん。まさかの同時洗いに、性感が大きくふくらむ。

「だ、だいじょうぶです……」

妙な感覚だけ……、玉洗いも……いい……。

竿と玉を丹念に洗いながら、葛葉さんの指が焦らすような速度で先端へと向かう。

「セックスはいいけどキスはダメってこと？ マジですか？」

「そうよ。なんか文句ある？」

「文句があるとかないとか以前の問題なんだけど……」

「ヤル気が吹っ飛んだといいますか……」

「しかしそんな繊細せんさいなオトゴゴロは、燐火に伝わってないようだ。」

「そんなことはいいから……。ほ、ほら……。さっさと挿れなさいよ……」

「パカッ！ と股を開き、挿入を促してくる。」

「……なんだこれ。」

「パカッてなんだよパカッて。」

「それが処女のすることか？」

あまりにひどいその振る舞いに、半勃起くらいはしていたナニが、しおしおと萎しおれていく。

「てかさ……」

「こんな処女っているのかな？ いろいろとオカシイよね？」

「やっぱり—— 種乞い狐？」

「うーん……」

「いつかい処女検査させてもらっていい？」

「俺は、もう少し状況を把握しようとしてそう要求した。」

「相手がそうなら男を連れ込んでやりまくってるだろうから、膜なんてもうないはずだ。」



つまり客観証拠になる。

「は？ なにそれ、あたしの言うことが信じられないっていうの？」

「うん。有り体に言う」と

それだけじゃないけど。

「ふ、ふぎけないで！ 検査とかありえないし！」

「嫌ならべつに。その代わりセックスもなしね」

「ううっ……。け、検査ってどうやるのよ……？」

「そりやまあ睦を広げて中を見る感じだよね」

両手で、くいつとマ○コを広げる動作をしてみせる。

実演つきの説明に、燐火はヒクツ、と頬ほほを震わせた。そしてその顔を見る間に赤く染め

「こ、こんの変態！ 初めてするって女の子になんてこと要求するのよ！ ドスケベ！
ケダモノ！ 鬼畜！」

「と言ってもほかにやりようなんてないし。それに、マ○コ見せるくらいでそんな嫌がってたらセックスなんてできないでしょ。……というか、そんな嫌がるってやっぱ処女じゃないんじゃないの？」

「しょ、処女に決まってるでしょ！ あ、あたしは……」

なにか言いかけるも、燐火はそこで言い淀む。

「あたしは？」

「……処女だったらちゃんとするんでしょうね」

「そりゃもちろん」

疑義は晴れるってことでいいだろう。

「……わかったわよ。好きにすればいいでしょ」

結局は折れる燐火だった。いい感じにチョロい。

「んじや布団に寝て、マンぐり返ししてくれる？ 膝裏を手で支えて、バランス取ってね」

うら若い美少女にとんでもない要求をしている事実に興奮しながら――

俺は、燐火の処女検査を開始するのだった。



俺の室には縁側がついていて、そこから羽城の眺望が思う存分楽しめる。陽の落ちたあとは星見に最適な場所へと様変わりし、高欄から天空を望めば星々に抱かれているような錯覚さえした。

続き部屋のここもまた、西側には同じ景色が広がっているんだろう。が、あいにくと壁で遮られており外を窺うことはできない。廊下側もまた壁で、俺の室とのあいだにある襖を閉じれば、部屋は完全な密室となる。

今日は月の輝く夜だった。窓さえあればまばゆい月光が射し込むんだろうが、残念ながらそれは叶わない。室の明かりはわずかに行燈が4基。その温かみのある煌めきが――

燐火のみずみずしい肉丘を妖しく妖しく照らしていた。

「へえ……、パンツ穿いてないんだ……」

膺裂も尻穴もいきなり剥き出しだったからびっくりしたんだが……。ハナからヤル気だつたってことなんだろうなあ……。

しかも燐火の装いはかなりスケベだ。質のいい仕立てではあるが、水屋着とか、ましてや振袖のようにちゃんとはしておらず、エロ和装とでも言えいいのか、男を誘うようにとどこころはだけている。

肩とか腋とか横乳とかが丸見えだったり、裾が超ミニと言っていいほど短く太ももが剥き出しだったり。そのうえで下着を穿いてないというのは、犯してくれと言ってるようなもんだろう。

「ん……。これが正装なんだから、しょうがないでしょ……」

マンぐり返しをし、俺にま〇ことケツを差し出した燐火が、恥ずかしげに視線を逸らす。しかしどうするのか気になるだろう、こつちをチラチラ見てきてもいる。

「ふーん？」

正装ってなんだ？ と頭の片隅で考えながら、俺は剥き出しになった燐火の股間とお尻に夢中になっていた。

いい形してるなあ……。

卑猥なほどむっちりと肉がつき、丸く張り出したデカケツ。同時にキュツと引き締まってもいて、肉厚でありながら美しい弧を描いている。そこから生えた太もももむちつとし



ている一方で太い印象はなく、どちらかというど細身の燐火がこれほど肉感的な下半身を
持っているのは純粹に驚きだった。

そしてその中央で息づく燐火のおま○こ。いやらしく盛り上がっているながら、恥毛はう
つすらとしか生えておらず、皸裂も線のように細い。うぶなスジが逆にエロいな……。
美しい彩りと甘い匂いに誘われた虫のように、俺は可憐なスリットを、ゆつくりとなぞ
り上げる。

「んっ、やだ……。いきなりなにするのよ……」
「いいから。動かない」

さすがにまだ濡れてはいないが、それでも初々しい処女肉は、俺が触るそばから熱を帯
びていく。上はともかく下の口はなかなかどうして素直なのかもしれない。

「んっ、んあっ、だからっ、なんで擦るのよっ……。処女かどうか確かめるだけのはずで
しよ……」

文句を言いつつもしつかり膝裏をつかんで姿勢を保つ燐火。時折、尻をピクッと震わせ
る様かどこか淫猥いんわいだった。

「いきなりじゃあんまり開かなくて奥が見えづらいでしょ。こうやってほぐしたほうが確
認しやすいの」

「ほ、本当に……？」

「うんうん」嘘だけど。

「な、なんでもいいからっ、んっ、早くしてよっ。こっちは恥ずかしいんだからっ」

「あわてないあわてない。……ところで参考までに聞くけど、自慰の経験ってどれくらいあるの？」

「なっ!？」

口をパクパクさせ、ついで顔を赤くし怒りだそうとする燐火の機先を制する。

「いや、そういうのいいから」

「そういうのつてなによ……」

「燐火ちゃんが処女ならセックスすることになるんだし、そうなたらその準備としてマ○コに指を突っ込んだり舐めたりするわけで。経験の有無を聞いたくらいで怒られてちゃ話が進まないでしょ」

「で、でもっ……」

「でももしかしめかかしもなし。聞かれたことには素直に答える。さんハイ」

「……あ、あるわよ、もちろん。そんなにいっぱいってわけじゃないけど」

言いつつ、ふいっと視線を外す燐火。

ふーむ……。強がつてるだけで実際はなさそうな反応だな。あつたとしてもなぞつたことがあらくらい、か……。

「こするよ」

中指をスリットにあてがい、盛り上がったマン肉を人差し指と薬指で挟み込む。指で肉をサンドイッチにする、そんな這わせ方だ。そしてそのまま律動を開始する。

「や、やだっ、なによっ、これえ……」

「ん、経験あるんでしょ？」

「あるけどっ、こんなへんなのっ、したことなんてないわよっ……」

「んじゃ覚えて。これがちゃんとした自慰ってやつだよ」

「へっ、変態っ……」

往復するたび熱を帯び、柔らかくなっていく燐火のマン肉。そして――

ちゅっ……、ちゅっ……。

幾度めかのそれで、指がぬめりをとらえる。

「濡れてきたね」

「し、知らない……」

「ん、わからない？」

体の変化をうやむやにしようとすする燐火。が、ソレを逃す俺じゃない。

水音が大きく鳴るよう、愛液を指に溜め勢いよくこする。

必然的に――

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……。

牝の発情した音があたりに響く。

「んあっ、あっ……。音、鳴らさないでよおっ……」

「君の体が鳴らしてるの。感度いいね、気持ちいいでしょ」

「べっにつ、こんなのっ……、なんともないわよっ……」

「喘ぎ声、もれてるのに？」

「し、知らないっ、知らないったらっ！」

瞳の潤みは増し、頬も赤らみ始めたというのに頑かたくなな……。

ま、これくらいの方が責め甲斐あっていいけどな。

「うん。綻ほころんできた」

指をずらすと、陰唇はうっすら花開いていた。蜜を垂らし、密ひそやかに男を誘っている。

「説明しなくていいからっ、んっ、は、早くっ……！」

「でも、もう少し濡らさないっ」と

俺はケツを引き寄せ、ちゅっつと濡れま〇こに口づけた。そのまま舌を出し、スジをれるろっつと舐め上げる。

「ちよっ、ちよっとなにするのよっ！」

抗議を無視し、さらにペろペろと舐めていく。すると舌に、愛液特有のピリッとした酸味が広がった。

まあ……、これも普通に人間の味だな。というアレだが、要は発情した牝が垂れ流す蜜の味だ。

「そのままじつとしてて」

先に注意していたからか、クンニを始めても暴れずひたすら身を硬くしていた燐火に念のため声をかける。そして俺は、舌をツンと突き出し、膣内へとソレを挿し入れた。

「ひっ、な、なに……？ んっ、んあっ……、あんた、まさか……」

さすがに自分の体だけあってなにをされてるのかわかったんだろう、肉襞を舌先で突く

たび燐火が体を震わせ、快感とも恐懼きょうくともつかない反応を見せる。

「気持ちよかったら好きに喘いでいいよ」

「んっ、だ、誰がっ、んんっ……、ばかなことっ、言わないでよっ……」

そう言いつつも、燐火はしっかり感じてようだ。牝汁を股間からどんどん溢れさせ、俺の口もとを汚していく。

「れろっ、えろっ、ちゅっ、ちゅう！」

「んっ、そんなっ、中までっ、舌を挿れるなんてっ……。へっ、へんたいいつ……！」

「じゅるっ、じゅるるるるっ、ぢゅるるるるるるっ……！ ちうっ……」

「やっ、やめっ、やめてえ……。そんなえっちい音たててっ……。吸いつかないでよお……」

…

「ちゅるるっ……。でも、ほら」

口を離すと、粘性の高い愛液が陰部にジワツと溜まり、いまにも溢れそうになる。

「吸わないと肛門とか腹に垂れ落ちるよコレ。あ、落ちた」

「ばかっ、ばかあっ……！」

羞恥にぢに耐えかねたように燐火は叫んだ。そして紅玉のような瞳に涙を浮かべながら、俺を睨にらみつけてくる。

ううむ。こうして見るとけっこうかわいいな。律儀りちぎに膝裏を押さえながら怒るところがとくにかわいい。

さらに気持ちよくしてやろうと、俺はま〇こにかぶりつく。

「やや子の……もと……」

触っていいよ、と声をかけたら、月夜ちゃんがそのほっそりとした指で陰囊いんものうを撫でさすってきた。

「ん……。軽く揉んでみて……」

「こ、こう……ですか……?」

「そうそう……。そんな感じでやさしくね……」

「やわらかい……です……。ふしぎな、感触……」

やわやわと揉まれる感じが心地よく、ちんぽにじんわりとした快感が広がる。

「あ……。いま、ピクって……。動き、ました……」

「気持ちよかったからね。とくに感じるのは亀頭だからおしゃぶりのときはそんないじらなくていいんだけど、変化をつけるためにやさしく揉んだり口に含んだりれる舐めたりしてくれると男としては嬉しいかな」

月夜ちゃんが恥ずかしそうな顔でコクリとうなずく。

「次は竿ね」

そそり勃つ砲身を示すと、月夜ちゃんが両手を軽くあてがった。

「し……。失礼、します……」

「陰茎——、ペニスとも言うね。あ、もつとちゃんと握ってみて」

指先でちよん、って感じだったので包み込むよう指示する。

「はい……。あつ、すごく……。あつい……。です……」



「手で奉仕するときは、そうやって握りながら上下させるんだ。ちょっとやってみてくれるかな」

「は、はい……」

言ったとおりにしてくれたものの、玉揉みのあとだったせいも、奉仕としては弱めの力加減。

「もつと強くていいよ。ぎゅって感じで」

「こう……ですか……？ んっ……太くて……硬い、です……」

月夜ちゃんが、小さな手で大きくふくらんだちんぽを一生懸命しごき上げる。

柔らかい手のひらの感触と、可憐な口もとから漏れる「んっ……んっ……」という甘い吐息。まだ少女といった風情の月夜ちゃんにいやらしいことをさせているという現実が、俺のペニスとさらに屹きりつ立たせた。

「いいよ。続けて」

ご褒美に、頭をやさしく撫でてあげる。

「んっ……」

嬉しそうに喉が鳴り、奉仕に熱がこもった。すると必然的に――

「ここ、見てくれるかな」

鈴口から溢れ始めた透明の液体。俺はそれを指し示す。

「これは……?」

「男が気持ちよくなってきた証あかし——カウパー液とか先走り汁とか言われるものだね」

「気持ちよく……」

それが嬉しかったのか、また一生懸命にしごき出そうとしたのを、俺は制止した。

「今度は亀頭をこすつてくれないかな？」

「きとう……?」

ちんぽの先端——笠になっている部分を円で囲む。

「ここだね。エッチなお汁が出てきてるところが尿道口。おしつことか精液が出るのもここ」

「せい、えき……。それ知ってます。やや子の素、ですよね? ……あう」

意外な反応に目を瞬かせると、月夜ちゃんは恥ずかしそうにうつむいた。ぴくぴくと動く、伏せられた狐耳がなんともかわいらしい。

「うん。がんばつてくれたらソレも出るからね。……カウパーを亀頭全体に塗つてくれるかな」

コクン、とうなずいた月夜ちゃんが言われたとおりに奉仕し始める。

くちゅつ、くちゅつ、くちゅり……。そんな淫靡な音がほそっこい指の間から聞こえてくる。

「あの……気持ち……いいですか……?」

「うん。とても」

「うれしい……です……。もっと……がんばります……」

頬を染め、うっとりとおぼろげな月夜ちゃん。

かわいすぎる……。

美貌の少女が俺の反応に一喜一憂する様が、この上なく愛らしく思えた。

「上、向いて」

「えっ……？ あっ……んっ……」

顔を近づけた俺を見て期待したんだろう、かわいく半開きになった可憐な唇を奪う。

「ちゅっ、ちゅむっ、ちゅつちゅ……れる、れるえろっ……ちゅうっ……」

亀頭にかかる手はキスのあいだも健気にずつと動いていた。目をつむりちゅつちゅつちゅつちゅと甘ったるいキスを繰り返しながら、一方では無垢な美少女の手淫を堪能する。

普通に気持ちよくなってきた……。カウパーも次々湧き出てくるし……。講義してるのか奉仕してもらってるのかわかんなくなってきたな……。

「ん、そろそろ舐めてみよっか」

「ん……ふう……、ふあい……」

名残惜しそうに唇を離し、亀頭に向き直る月夜ちゃん。肝心のイチモツは牡汁によってヌラヌラとテカリを帯びていた。俺は卑猥な物体と化したソレを指しながら説明を再開する。

「まずはここ。裏筋って言うんだけど、男がいちばん感じる場所なんだ。舐めてみて」

月夜ちゃんが亀頭のすぐそばまで顔を近づけ、その愛らしい口を開く。中から現れたのは桜色の小さな舌だ。それをおそろおそろ裏筋へと押し当ててくる。

「んっ……れろっ……」

ひと舐め。怖々^{こわわ}と俺を見上げる月夜ちゃん。うなずいてやると安心したように二度三度と本格的に舌での奉仕を開始する。

「れろ……えろ……、れろっ、れりゅっ……へろっ、れろっ……」

ぎこちない動きで繰り返される奉仕。しかし時折かかる生温かい吐息や、俺の様子を窺う上目遣い、そして裏筋を這い回る舌によってじんわりと快楽が蓄積していく。

「おひるがっ……れろっ、れろっ……」

裂け目からは我慢汁が止めどなく溢れ、構造上の理由からすべて裏筋へと垂れ落ちていく。月夜ちゃんがこぼさないよう必死に舐め取ろうとするが、そこは小さな舌に小さいお口。ぜんぶをすくうことはできないようだ。

「直接こつちを舐めてみようか」

そう言っつて鈴口を示す。

「ん……ふあい……」

月夜ちゃんは肉棒をそのまま舐め上げ、舌を尿道口に押しつけた。

「れろ、えろ……んっ……はあっ……ふうっ……」

ペロペロと舌を動かしひと呼吸。小さな口を窄め^{すぼ}鈴口にちゅっつと吸いついてきた。

「くっ……」

心地よい刺激に、腰が跳ねる。

「ご、ごめんなさい……。痛かった……。ですか……?」

「いや、違う。気持ちよくてびっくりしちゃったんだ。続けてくれるかな?」

「はい……!!」

月夜ちゃんが前向きな声を出し、汁まみれの先端に口づける。

「ちゅっ、れろえろっ……ちゅむ、ちゅ、れりゅっ、ちゅむっ……ちゅっ……」

思った以上にがんばるなあ。俺は素直に驚いていた。

テクがどうこう以前に、月夜ちゃんは性知識がほぼ皆無だろう。だとすればグロテスクなペニスに向き合うのも気き後おれするはず。それでも教わった内容を習得しようと必死にちんぽへと吸いついてくる。そのいじらしい姿が俺の胸を打った。

これだったら——いけるかな？

「口、大きく開いてみて」

「ふあ……い……」

牡汁と唾液にまみれた口をぬぷつと開く月夜ちゃん。

「ちよつとだけペニス、啜えてみようね」

思った以上に小さい頭部をつかみ、にゅぷうっ——とちんぽを口内へと押し込む。

「んっ、んんっ!! んうっ、んんっ、んっ……」

もちろん喉奥まで突き込むといった非道なマネはしない。亀頭を少し啜えさせただけが、月夜ちゃんの小さい口ではそれでもギリギリのようだ。

「舌でちんぽ舐められる？」

「ん……っ……、れろっ……、れろっ……」

苦しげではあったが、月夜ちゃんはなんとか舌を動かし、口内に差し込まれた亀頭を舐

め上げる。

「れろっ、えろ……、れりゅっ、んっ、んうっ……」

なんとか続けようとするものの……このあたりが限界か。

「ん。えらいえらい。……じゃあいったん抜くから」

じゅぷっ……、と小ぶりで愛らしい口もとから赤く腫れ上がったペニスを引き抜く。うん、なんとというコントラストか。背徳感でおかしくなってしまうそうだ。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあ……、あっ……、はっ……、あっ……」

「よくがんばったね」

頭をまた撫でながら――

さて、このあとをどうしよう。

初めてのおしゃぶりとしては充分だろう。ここで終わりにしてもいい。ただ――そうすると気持ちよくさせられなかったと気に病みそうなんだよな。けっこう思い詰めてしまう性格のようだし。できれば射精するまでやって自信をつけさせたいけど――

と迷っていたら、息を整えきっていないにもかかわらず、月夜ちゃんがちんぽに手を伸ばしてきた。

「最後まで……ご奉仕……したいです……」

「月夜ちゃん……」

やっぱこういう子なのか……。成果がないとどうにも不安なんだろう。「わかった。なら射精するまでやってもらおうかな」

学びをもとに、自由にさせてあげたいが、それだといつ射精できるかわからない。というわけで両の手で竿をしごきながら裏筋を舐めたり吸ったりするよう指示を出した。性感到に直結するところを集中的に刺激してもらって時間短縮を図るのだ。

「んっ、えろ、ちゅむっ…ちゅぷっ、へろっ、ちゅ、ちゅっ…」

陶然とした顔でちんぽに吸いつく月夜ちゃん。手も言われたとおりに唾液まみれの竿をにゅぷぬちゅとしごき上げてくる。

「きもひよく……なって……くらはい……」

鼻にかかった甘ったるい声での、お願い。健気でいやらしい彼女の様子さえ射精欲求に変えるよう俺も努力を重ねる。

「ん。いいよ。もっと強く舐めてこすってしてみようか」

「ふぁ、い……！ れろ、ちゅむっ……ちゅぷっ……ちゅるっ、ぢゅるっ、へろっ、れろっ……」

「くっ……、あつ、上手上手。ん、そこもつと吸いついて」

「はむっ、ちうっ、ちゅれっ……れむっ、ちゅっちゅっちうっ……！」

弱いところに吸いつかれ、ゾクゾクっという快感がペニスを貫いた。打てば響くような従順さもたまらない……！

「いいよっ、もう少しっ」

気づけば俺は射精寸前まで追い詰められていた。亀頭はパンパンに張り詰め、いまにも弾けそうだ……！



「くらひゃい……せいひ……！」

その言葉とともに月夜ちゃんはちんぽをかぶつと啜え込んだ。亀頭の先つちよだけではあったが、大きく広げた口を今度は窄め、ちゅうちゅう吸いつきながられると舌を動かしまくってくる。そしてさらにはぬちよぬちよの竿を一生懸命にしごき上げる小さな手。そのコンボは甘すぎた。

「口に出すよ」

躊躇したが、けつきよく俺は口内射精を選択し――

どびゅっ、びゆるるるるっ、どぶっ、ぶびゅっ……！！

大量の精液を、小さな口ま〇こに流し込んだ。

「んっ……んくっ、んっ、んっ、んんっ……」

コクコクと喉を鳴らし、それを飲み干していく月夜ちゃん。

精飲させる罪悪感は募るけど最高だ……！！

「けほっ、んんっ……けほッ……」

「あ、無理して飲まなくていいよ」

こらえきれずにむせた月夜ちゃんは、それでもこぼすまいと両手で受け皿を作る。

「んっ、はあっ……でも……せっかく……っ……、なのに……」

「最初はどうしてもそうなっちゃうって。これから飲めるようになればいいんだし」

「はい……」

「それより本当にがんばったね」

なんのおためごかしもなく、俺は月夜ちゃんの労ろうをねぎらった。実際ここまであっさりイカされるとは思ってもみななかった。

「うれしい、です……」

じゃあ——

「次は、月夜ちゃんの番……だね」

「あんっ!？」

ミニスカートのような裾口に手を突っ込み、月夜ちゃんの下腹部をまさぐると——
くちゅ。

月夜ちゃんの秘苑ひえんは濡れ濡れになっていた。

「初めてのちんぽ舐めでこんなに濡らしちゃったんだ」

「正装ゆえにはノーパン。指で直接、はしたなく潤った小さな腭裂をまさぐる。

「んっ、ふあっ、んっ、んんっ……、んっ! あっ……!」

感度も悪くない、と。

「イク経験、しておこうか」

「はひ……、おねがい……しましゅ……!」

小さなワレメをくにくにゆともてあそぶ俺を陶然と見上げながら——
月夜ちゃんは、甘い甘い喘ぎ声を漏らした。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>